観察されない個人間の異質性が企業規模と賃金の関係に与える影響
――東大社研パネル調査（JLPS）データの分析（4）――

東京大学　小川和孝

1　目的

本報告の目的は，パネルデータにおける個人間の観察されない異質性が企業規模と賃金の関係に与える影響を検討することである．

パネルデータにおいては，個人間の観察されない時間不変の異質性は，固定効果モデルによって完全に除去可能であることが知られている．その際に，個人間の観察されない時間不変の異質性はそれ自体は興味のある対象と見なされることは行われず，独立変数の推定値へのバイアスをもたらすものとして，見なされる場合が多い．

本報告では，個人間の観察されない時間不変の異質性が独立変数と交互作用を持って従属変数への影響を及ぼす可能性について検討し，それによって因果のメカニズムをより明らかにすることができることを主張する．日本の労働市場における企業規模と賃金の関係を分析対象として用いる．

2　方法

「働き方とライフスタイルの変化に関する全国調査（Japanese Life Course Panel Survey: JLPS）」の若年・壮年パネルにおける，第 2 波から第 7 波の 6 年次分（2008-2013 年）のデータを用いる．従属変数は労働時間で割った時間あたりの賃金を用いる．注目する独立変数は，現在の職場における企業規模である．本稿では，個人間の観察されない異質性は，学歴や勤続年数には反映されない，研究者からは観察困難な能力であるという仮定を置く．

Lemieux（1998）のモデルを参考に，個人の観察困難で時間不変な能力が，企業規模と交互作用を持って時間あたりの賃金に影響を及ぼしているかどうかの検討を行う．これは，GMM 推定の一種として行われる．

3　結果

観察されない個人の能力は，企業規模ごとに異なる影響を賃金に与えている結果が得られた．これは，観察されない能力に対するリターンが企業規模によって異質性を持っているということを示している．

4　結論

分析で得られた結果は，Ferrer and Lluis（2008）で示唆されるように，企業規模が異なると個人の能力についてのモニタリングのコストが異なるという理論的説明と関連していると考えられる．本稿で示されるのは，観察されない個人間の異質性は必ずしも除去すべきものではなく，独立変数がランダムでない割り当てが行われている観察データ（observational data）において，因果メカニズムに対する有益な理解の源泉になりうるということである．

【謝辞】

本研究は，科学研究費補助金基盤研究（S）（18103003, 22223005）の助成を受けたものである．東京大学社会科学研究所パネル調査の実施にあたっては，社会科学研究所研究資金，株式会社アウトソーシングからの奨学寄付金を受けた．パネル調査データの使用にあたっては社会科学研究所パネル調査企画委員会の許可を受けた．